

一 始めに結論付ける。

「言葉なんて、本当はどうでもいいんだよ」彼は彼女の顔を直視できずに、声だけを注意深く聴いていた。それ程、静かな重みを湛えていた。しかし声とは裏腹に、表情は穏やかなものだった。

「何故って、言葉が無ければ嘘も無い」

堤防の表面には誰かのいたずらか、工事の欠陥か、錆びた釘が飛び出していた。彼女はそれを左手の人差し指と中指でつまんだり、ひっぱったりして、無意識にいじっていた。

釘だけでなく、潮風もそこに在る。ありとあらゆるもの全てを何も構わずに朽ちさせていった。

「全ての言葉は嘘だし、それが本当だってことは誰も分かりっこないのさ」彼女の言葉は順を追ってつまびらかになっていく。開示されるたびに彼の恐れは増していった。彼女の言葉が向けられているのは彼なのか、風なのか、それすら疑わしい。それから彼女の言葉が開かれるまでにかかなりの時間が在った。彼の焦燥は加速する。何かを言おうと開かれた口を潮風が乾かし去っていくだけだった。

二人の頭上は灰色の雲で覆われ、海の向こうには黒い雨雲が漂っている。彼が言葉を思いつくより先に、彼女が終わらせた。

「今日はもう帰ろう。来週もここで待ってる。また会おう」

二

来週が来るまでの毎日、布団に入り寝付く前に彼は彼女のことを考えた。言葉の一つ一つを思い出し考えた。その一つ一つが彼の胸のうちを微かに波立たせ、得も言えぬ不安を立ち昇らせた。言葉の一つ一つをたぐるようにつかんでいけば、舌体に触れることができると思つた。しかし考えれば考えるほど、それが根本からの間違いであることが分かった。彼女の言葉は雨上がりの土くれのように触れた途端にほどけくずれてしまうのだ。言葉は砂となり、砂は潮風を呼び、潮風は彼を貫通して寂寞を残す。残ったところは錆びがかっている。眠ろうと目を閉じても考えはやめられなかった。全ては彼女の言葉のせいだった。彼は考え続けた。潮風のように全てを朽ちさせていく言葉の数々。寝付くまでに一時間はかかっただろう。

三

同じ時間の同じ場所に彼女はいた。一週間前ほど天気は悪くなかった。

「この一週間、君の言葉のことを考えてたよ」

「どれぐらい？」

「考える前の自分を思い出せないぐらい」事実、彼は見違えるように疲弊していた。彼女は手で釘をいじり、片方の手で口元を覆いながら横目で彼の様子を伺っていた。彼は両足を堤

防の向こう側へ垂らし、両手を所在なさに組み、背骨を丸めて伏し目がちになっていた。

「この一週間、君に何か残したいと思った、私は、ね」彼女は海に言葉を放るようにつづいた。彼は既にいっぱいだった。彼女とのこれまでを考え馳せると、彼女から与えられてばかりだったから、彼は既にいっぱいだった。これから先、彼から彼女に、何かを与えられることがあるだろうか考えた。

「私も私なりに、たくさん考えたのさ」風は止まない。やや荒れた手触りで二人をかすめていき、陸のうちへ溶けていく。

「それで決めた。これから君に私の秘密を一つ、あげようと思う」

「秘密？」

「ただの秘密じゃない。とびっきりの秘密ね。私のママに知られたら恥ずかしさで身体が崩れるぐらいのとびつきりをね」彼は微動だにしない。その風貌で彼女に次の言葉を促す。彼女はそれを了承する。

「秘密はワイザツでもないしインサンでもない、けれど確かに私の生身だし、誰にも話したことがない。長い間」彼の沈黙は続いた。

「一つ、気がかりなのは、私の秘密を君が欲しいものなのか、ってことなだけどね」

「君は私の秘密を言って欲しいの？」彼はその場で答えられない。

「また来週会おう。その時に君の言葉が聞きたいね」

四

また一週間彼は考えた。しかしいくら考えども、答えは出なかった。彼女の言葉は咀嚼する前に崩れていくのだ。考えれば考えるほど、彼の思惑は沈み溺れていった。焦るほど重心の所在を失くし、深いところまで至ってしまった。

彼が縫りつけるものは目に見えるものしかない。陸を囲う堤防。堤防から出る錆びた釘。釘から伸びる彼女の指々。指々が収束して一つになる腕と皮膚。皮膚を覆う白いシンプルなシャツ。シャツからのぞく骨の描くくぼみ。くぼみが支える端正な顔。顔の表面で最も美しい目。彼を射す目。生まれてから今に至るまで、多くの色を浴び、言葉を編み出してきた目。小さな部屋の小さな布団の上で、彼は妄想の目に縫りついている。

彼女の言葉で彼の全てがすきみ、潮風はここにも届いている。目に見えるものが全てで、確かだ。今にも不安のどん底に落ちそうな彼は、いつもの堤防のことを想った。あそこでは、彼の足は何も踏みしめていなかった。宙を蹴ることだってできた。それが何十年も前の出来事のように思える。両手と一緒に思いっきり伸びをすることだってできた。無機質なコンクリートの堤防が全てを支えてくれていた。腰を浮かせば、海へ飛んでいくことだってできたのだ。しかしそれら全てを、彼はやらなかった。その時、思いつきもしなかった。後悔がかさましていく。数日前が何十年も遠くに感じられる。

堤防を思い起こしても、おぼろげでしかなかった。やはり目に見えるものが全てなのだ。

五

また堤防で落ち合う。彼女は清楚な服装で、彼はさらにやつれていた。おぼつかない意識

をかううじてつなぎとめ、いつものように腰を下ろしていた半面、潮風を受けるたびに体が傾いでいた。

「今週もたくさん考えたんだ」最初に話したのは彼だった。

「きつとありふれたことだし、本当は大したことではないのかもしれない。だけど僕は考えるだけですごくつかれたし、何かと戦ってるみたいにくたびれたし、たぶん傷だらけになったと思う」

「でも、君どこもケガしてないじゃない」

「傷だらけってのは比喩だよ。ただの例えだよ」

「例え、ね」ゆっくり囁むように彼女はうなずいた。

「本当じゃないけど嘘でもないってことだ」

「まあ、そう、そういうことだね。見えない傷ができたと思う。本当ではないけど」彼は息を吸って、すこし時間を空けてそれを吐いた。それだけで気分が落ち着いた。それから彼は言った。

六

僕はなんだかとても怖かった。だって、何を言っても僕の言葉は嘘だと思われるかもしれないし、僕だって僕の言葉が嘘なのか、本当なのかわからないんだ。つまり、結局………その………なんて言えばいいんだろう………。………僕はこうやって話をしている最中も戦い続けているんだ。今にも不安で押しつぶされそうだし、僕の言葉の味方が君なのかもわからない。とにかく苦しい。なおさらわからない。君の秘密を僕が聞いたとして、それが嘘なのか本当なのかもわからない。僕はそれを確かめられない。そんなことをずっと考えてた。この一週間。

………結局、わかったことなんて何もなかった。だけど、一つだけ決めたこと、というか、僕が本当に欲しいものがわかったんだ。

たとえそれが嘘だとしても、本当だとしても、僕は君の言葉が欲しいと思う。君の秘密を聞きたいと思う。君が今まで、どれだけ本当のことを言って、どれだけ嘘を言ったのかわからない。わからないけど、それも全部合わせて、混ぜてできたものが今の秘密で、これからの言葉なんだと思う。僕にとって、これが例え嘘だとしても、見えるものが全てで、聞こえる言葉が全てなんだ。僕はまだ弱いから、わからないことばかりだし、見分けるための目もない。だから君の言葉が欲しい。

七

彼女は彼の言葉を一步一步引いて品定めするように吟味した。言葉を封じるようにして左手で口元を隠し、彼の眼差しを眼差しで返し、視線は接続している。

彼は彼女の眼差しを眼差しで返し、つながり続けた。二人の距離は変わらないものの、彼の焦点は一步步近づいていった。彼女の目は厚くふくよかな瞼のまんまなかに鎮座し、曇り一つない真っ白な表層に栗色の虹彩が視線を据えている。虹彩を縦断する細い線は中心に向かっているのか、それとも周縁に発散しているのか、綺麗な円を描いて太陽の輪のように

